

どんなことにも理由（わけ）がある

教育研究所 所長 佐伯 胖

昨年11月に、また（たしか、三度目だが）イタリアのレッジョ・エミリアでの研修に参加した。レッジョ・エミリアというのは、優れた幼児教育の実践で世界的に有名になっている街であり、その子どもたちのアート作品の展覧会は我が国でも何度か開催されており、いずれも大盛況であった。

今回は、長くイタリアに在住していて大変イタリア語に堪能な方が通訳をしてくださったので、実際の保育の現場で、保育にかかわる担任保育者やアトリエリスタ（芸術指導員）が、一人ひとりの子どもにどのような「言葉かけ」をしているかを、その場で「実況中継」（ただし、小声で）してもらった。

保育者や芸術指導員が、一切「指示的なこと」（「こうやったらいい」とか）を言わないであろうことは予想していた通りで、別段、驚くことはなかったが、子どもに「なぜ、そうしたのか」の理由を丁寧に聞き取っていることには驚いてしまった。石ころ一つをちょっと考えてある場所に置いたとすると、すかさず、「どうしてそこに置いたのか」と尋ねるのである。子どもの方も、別段、うるさがる様子はなく、それなりの理由づけを答えている。そういえば、レッジョ・エミリアの保育者が日本の保育を見学して、むしろ逆に驚いていたのは、保育者が子どもに「話しかけていない」ことだった。

小学校の授業実践を数ヶ月間観察した人の報告を聞いたのだが、その教室で、しょっちゅうけんかをする二人の子どもに対し、担任教師はけんかがはじまると、「あなたたち、教室ではけんかしてはいけません。外でやりなさい。」といって教室から追い出す。みていると、けんかはおさまるところか、ときにものすごい殴り合いまでやって、いつまでももどってこないという。なぜ、「理由」を聞かないのか。「理由」を言わせないのか。さらにそれぞれの「理由」のさらなる根拠を聞かないのか。根拠の正統性を問題にしないのか。それでも決着がつかないなら、そのときはどうすればよいかを一緒に考える（まさに、決め方を決める）……。

どうも、日本という国は、物事の理（ことわり）をきちんと示しあって正すという、「どんなことにも理由（わけ）がある」ことを認め合うという風習（？）がなさすぎるのではないだろうか。それは、家庭から、幼稚園から、小学校から……ともかく、できるかぎり早い時期から始めるしかない。（2017. 3. 31）